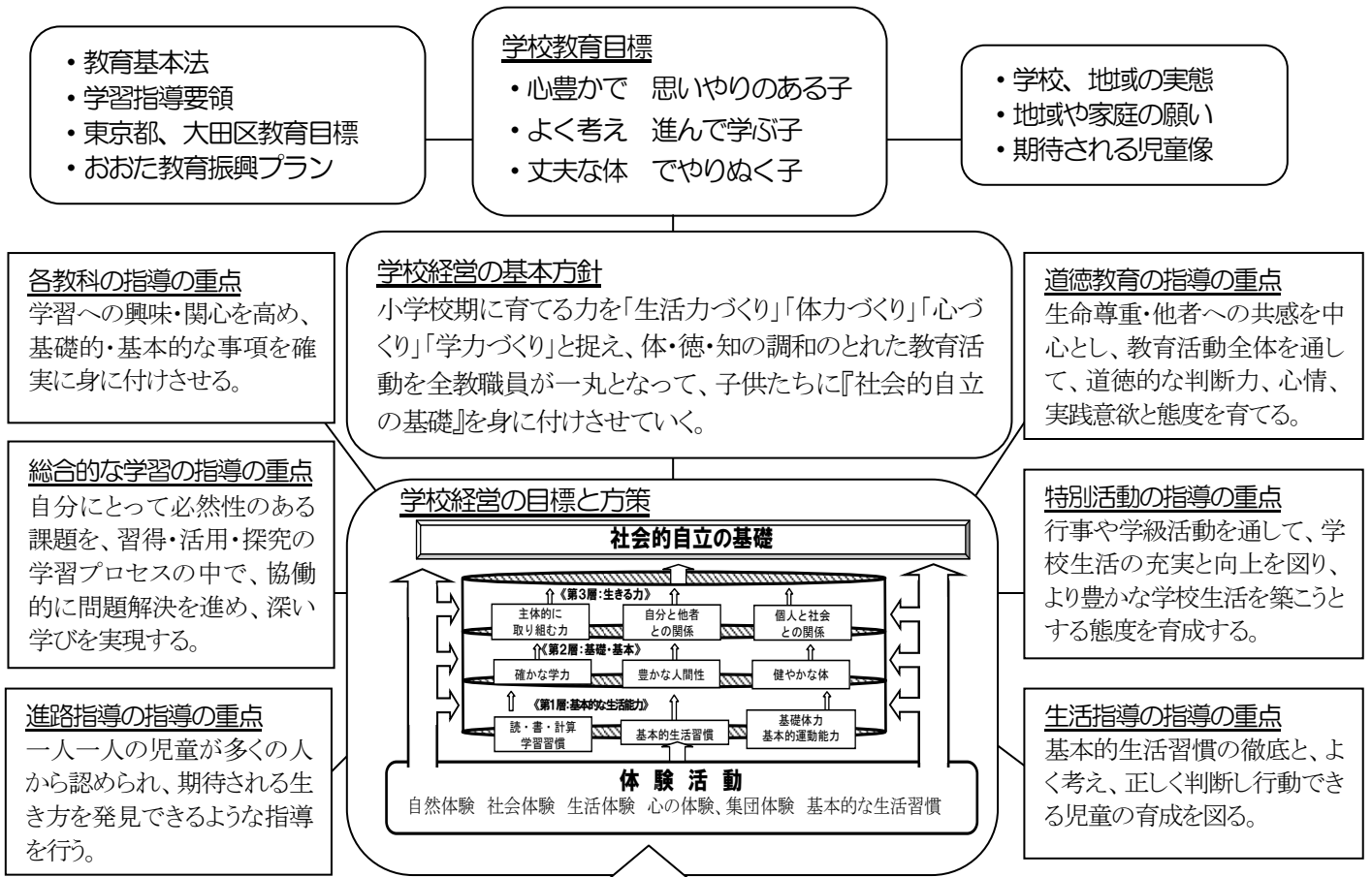


平成28年度【大田区立山王小学校・授業改善を図るための全体計画】



本校の授業改善に向けた視点

教育課程編成上の工夫	学習指導の工夫・改善	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携	校内における研究や研修の工夫
<ul style="list-style-type: none"> 各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間について、学期ごとにその実施時数を見直し、年3回の土曜学校公開の振替休業日を設けず授業を行うことで、時数の確保を図る。 算数科において、習熟度別指導及び少人数指導を取り入れ、基礎・基本の充実を図る。 朝の時間を活用して、定期的に読書活動を行い、言語活動の基盤とする。 小・中の連携を生かした教育活動を行う。 オリパラ教育を計画的に各学年の教育実践に関連付け、児童に日本人としてのアイデンティティと豊かな国際感覚を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 体育科の授業を中心に、新学習指導要領のキーワードであるアクティブ・ラーニングを意識しながら、教師の指導力が問われるインプット型の授業(詰め込み型)からアウトプット型の授業(課題解決型、活用・探究型)へと変換を図り、他教科にも活かしていく。その過程の中で、児童の思考・判断・表現力を高める。 「話す、聞く、書く」の表現活動を様々な学習場面に取り入れ、コミュニケーション力の伸長を図る。 体力テスト、都体力測定を有効活用し、一学級一実践を計画的に進め、児童の体力向上を図る。 情報を収集・整理する力を養うために、新聞やインターネットの活用を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教科とも評価規準及び評価基準を明らかにした評価計画を作成し、実践に役立てる。 基礎・基本の学習では、学習カルテなどの活用を図りながら、個々の評価を行い、次の段階の指導に生かす。 教科の観点別評価内容については保護者会などを通じて学期ごとに保護者に説明を行う。 総合的な表現活動の発表の場として運動会や学芸会を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者会や地域教育連絡協議会、スクールサポート山王の会などを通して、地域や保護者と連携を深めると共に、外部評価を教育課程編成に反映させる。 地域や保護者に向けた道徳授業地区公開講座を実施し、道徳教育の向上に努める。 大田区体力向上モデル校として、体育・健康教育の授業公開や講演会を実施し、地域や保護者との意見を募り、児童の体力向上をともに図っていく。 夏季休業中に地域、保護者、近隣学校との協力をもとに、夏休みわくわく講座を開催し、交流を深める。 「お話会(読み聞かせ)」や「ことばのけいじばん」の設置などをPTAや地域ボランティアの協力を得ながら、読書活動の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題を「健やかな心と体の育成」とし、体育科を中心にした校内研究を進める。その取組の中で、児童が自分にとって必然性のある課題を繰り返し解決していく中で、主体的に取り組もうとする意欲や協働して物事を解決していく姿勢を培うとともに、教師の指導力の向上を図る。 6分科会で年間6回の提案授業を行うとともに、1・2学期に各1回の授業を全教員が公開し、互いに参観し合う中で、授業力の向上を図る。 各教科主任は、指導教諭の授業で学んだことを、報告会を通して、他の教員に広め、学校全体の学習指導力の向上を図る。

国語科

国語科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<取り組みにおける成果と課題>

- 話し合いの内容を聞き取る力・自分の考えを正確に伝える力を高めることを目指した。
 - ・自分の立場や意図をはっきりさせながら話すことを意識付けさせることができた。
 - ・日記や感想などを書く活動を増やし、「書く」ことを習慣付けさせたことにより、自分の考えをまとめて書く力を身に付けさせることができた。
- 言語に対する知識・理解・技能の定着を目指した。
 - ・文の構成についての学習を繰り返し行うことにより、定着を図ることができた。
 - ・辞典で調べる機会を増やしたり、読書に親しむ時間を確実に取ったりして、伝統的な言語文化に触れさせることができた。
- 条件に合う情報や根拠となる情報を読み取る力を高めることを目指した。
 - ・登場人物の心情や筆者の意図を正確に読み取る際に、必ず根拠となる文章を見付けさせたことにより、読み取る力を高めさせることができた。

国語科における調査結果の分析

領域・内容別結果の分析	<ul style="list-style-type: none">○「書くこと」に関しては、どの学年でも区の平均を大きく上回っている。しかし、全く正答が出せない児童が複数みられるなど、個人差が大きい。○「言語についての知識・理解」に関しては、ほとんどが目標値を上回った。しかし、4年生はローマ字の読み書きについての正答率が目標値を下回っていた。○「話すこと・聞くこと」に関して、目標値を上回ってはいるものの、100%正解の児童と平均を下回っている児童が見られ、個人差が大きいことが分かる。○「読むこと」については、表と文章を照らし合わせる読み取りで、区の平均を下回る学年があった。
観点別結果の分析	<ul style="list-style-type: none">○国語への関心・意欲・態度 全体的に正答率は区や全国の平均を上回っている。漢字練習、音読、読書といった継続的な学習に対する意欲では児童により個人差が大きい。○話す・聞く能力 全体的に正答率は区や全国の平均を上回っている。「互いの考えの相違点や共通点を考えながら、進んで話し合うことができる。」という項目での誤答が目立つ。○書く能力 目標値、区平均、全国平均を上回っているが、昨年度の校内平均よりも下がっている学年があることや、個人差が大きいことが課題である。○読む能力 4年生は、調べた結果の表と文章を読み取る問題で、区の平均を下回っている。表と関連付けて考える力が身に付いていないと考えられる。○言語についての知識・理解・技能 ほとんど目標値を上回っているが、ローマ字を読むこと、書くことについての正答率が目標値を下回っており、もう一度基礎から復習する必要がある。

調査結果に基づいた授業改善のポイント

1. 話し合いの内容を聞き取る力を高める。
自分の立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合おうとする機会を増やす。状況に応じて話型を確認したり、聞いたことを文章に書き表したりするなど、話す力・聞く力を高めるための活動を日々の授業に取り入れる必要がある。
2. 文の構成と敬語など伝統的な言語文化と国語の特質に関する理解の定着。
言葉調べや日記を書く活動など、熟語や文にたくさん触れさせ、語彙を増やす。
3. 条件に合う情報や根拠となる情報を読み取る力を高める。
物語や説明文の読み取りは目標値を大きく上回っているが、パンフレットや話し合いの読み取りは正答率が低くなっている。文章の読み取りだけでなく、グラフや資料の読み取りをする機会を増やすなど、総合的な学力を伸ばせるようにする。

国語科の授業改善策

・語彙を豊かにし、「話す」「書く」につながる言葉の力を付けるために

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・言語環境を整え、読書環境の充実を図る。 ・文章の中での長音・拗音・促音・撥音の表記、助詞を正しく使うことを中心に指導する。主語と述語の関係を意識して文章を書いたり、話したりする。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・辞書を引かせ、意味の合った言葉の使い方ができるようにする。 ・読書に親しませ、語彙力を付ける。 ・ローマ字を書いたり読んだりできるように基礎を繰り返し学習する。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・語句の構成、変化、由来、文章の中での関係などに関する理解を深める。日常生活で活用できるように、場に応じた敬語の使い方になれる。 ・多様な読書活動と国語辞典からの適切な言葉の意味の選択を通し、日常的に語彙を増やす言語活動に取り組む。

・相手や目的を意識して、全体の構成を考えた文章を書く力を付けるために

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を書くことを日常的にするために、日記の指導を継続的に行い、「書くこと」に対する抵抗感を減らし、意欲をもてるようにする。 ・事実に加えて、思ったこと・理由など、説明的な文を書けるようにする。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめ・中・終わりの構成を考え、段落相互の関係に注意して書けるようにする。 ・目的や必要に応じて書こうとすることの中心を明確にしなが、事例や根拠を挙げて書く活動に多く取り組む。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の感情や意見がより適切に伝わるように、日記を定期的にかかせ、表現力の向上を目指す。 ・自分の立場や意図を明確にして文章全体の構成や効果を考え、資料や図表・グラフなどを活用して、事実と感想、意見を区別して書けるようにする。

・文学的文章や説明的文章を正確に読み取る力を付けるために

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の動きに目を向けて、出来事の時間的な経過や順序を考えて、想像を広げながら場面の様子を読み取れるような言語活動に取り組む。 ・説明的文章では、言語的な理解に加えて、具体物や写真・絵などの資料から、視覚的に理解が深まるように指導を重ねる。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・文学的文章では、登場人物の性格や気持ちの変化、場面の情景などを視点に、場面の移り変わりに注意して読む。 ・説明的文章では、文章からだけではなく、資料や記録の読み取りを行わせる。段落相互の関係や全体の構成、事実と筆者の意見や主張の関係を考えながら読む。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・文学的文章では、登場人物の相互の関係や心情、場面の描写をとらえられるような言語活動をする。 ・説明的文章では、事実と感想・意見などの関係に着目して段落の要点をまとめたり、全体の要旨をまとめる力を高めたりする。 ・筆者の主張に対して、資料や記録など根拠をもとにした自分の考えを述べる活動を取り入れ、意見を明確に述べるができるようにする。

算数科

算数科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<取り組みにおける成果と課題>

- ◎問題場面や資料を読んで「分かっていること」「分かっていること」を整理した上で、その場面を具体的にイメージし、絵や図、式、言葉、数直線など多様な方法で表現させ、説明させる活動を通してその表現方法や考え方を共有することができた。しかし、表現に個人差もあり、継続的指導が必要である。
- ◎ステップ学習により間違ったところを大切にす指導・継続的な家庭学習習慣の確立を図る指導・補習教室により理解を確かめたり、習熟を図ったりする指導により、計算方法については概ね理解が定着したが、間違い直しや同じ間違いを繰り返さないよう、指導の徹底が必要。
- ◎前年度に学習したことの定着が低い児童に対し、単元の中で復習する時間を意識して設けることで新しい学年の学習に対する理解を確かにする事ができた。

算数科における調査結果の分析

領域・内容別結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の全ての領域で平均正答率が目標値を上回った。学習の実現状況については概ね良好といえる。しかし、校内正答率で見ると前年度に比べて、すべての領域で正答率が下がっている。 ・4年生では、記述問題や説明を促す問題では、目標値は上回っているとはいえ、正答率が低かった。 ・5年生では、目標正答率を上回っているものの、「面積」と「折れ線グラフと表」に関しては、正答率が60点台となっており、やや苦手な傾向にあるといえる。 ・6年生では、「整数の仲間分け（奇数と偶数）」の問題で他の領域に比べて正答率が低く、目標値を下回った。「小数の計算（小数第二位×小数第一位）」の問題で、目標値と同じ値であるが前年度と比べると大きく下回っている。
観点別結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ○どの観点においても、区の平均正答率を上回っている。 ○「算数への関心・意欲・態度」 授業中、進んで問題解決に取り組み、意欲的に発言する児童が多い。観点別正答率から見ても、目標値を上回り、高いといえる。 ○「数学的な考え方」 すべての学年で、目標値から15%以上と大きく上回っており、良好といえる。数学的思考力は確かであるといえる。 6年生では、複数の解き方を考えるなど、問題解取り組みことのできる児童が多い。文章問題を解くための立式の力が伸びたと思われる。目標値・区内平均正答率と比較しても、校内平均値が大きく上回っている。 ○「数量や図形についての表現・処理」 計算処理の能力は全体的に高いと思われる。6年生では、「整数のなかまわけ」での整数を奇数と偶数に類別する問題、「分数と小数」での小数を1/1000にした問題、百分率を用いて代金を求める問題で、正答率が低い傾向にある。4年生では、余りのあるわり算の計算問題で唯一全国正答率を下回り、課題が残った。 ○「数量や図形についての知識・理解」 4観点の中で最も数値が高い。目標値との比較からも概ねよくできている。しかし、どの学年も昨年度の校内平均点より2～5%落ちている。

調査結果に基づいた授業改善のポイント

1 文章題の題意を捉えたり、資料を読みとって解答したりする力が十分でない。

→引き続き、問題や資料を読んで「分かっていること」「分かっていること」を整理するだけでなく、児童が問題場面を具体的にイメージできているのかを絵や図や式、言葉など多様な方法で表現させ、それを説明させる活動を授業の中に取り入れる。また、クラス全体の前だけでなく、ペアリングなどを取り入れ、全児童が活動する機会を持てるように学習計画を立てる。

2 問題解決の根拠をもち、自分の考えを表現する力をさらに継続的に指導する必要がある。

→自分の考えや立式の根拠を説明したり記述したりする活動を多く取り入れる。また、友達の考えや立式の根拠を式を読みとって、説明する活動も多く取り入れる。また、図形の定義をしっかりと覚えさせ、根拠とすることも大切にする。

思考力の高い児童については、既習事項を元に複数の解き方が考えられるようにする。

3 数量関係や図形についての理解に課題がある。

→分数・小数の単位変換や公約数を活用した問題、知識の活用が求められる図形問題で課題がある。

算数用語を理解した上で頭の中に入れられるよう、授業の中で繰り返し覚えさせる。

今までも取り組んできたが、ステップ学習のプリントの間違いの直しを徹底させ、同じ間違いを繰り返さないようにさせたり、問題になれるようにさせたりする。

4. 東京ベーシックドリルにより前学年の内容の学習達成率を把握するとともに徹底理解を図る。

→東京ベーシックドリルの「診断テスト」によって、前学年の学力を評価する。80%達成しなかった児童に対し、「解説シート」・「練習シート」に取り組みせ、必要な個別指導をした上で、再テストを受けさせる。

「診断テストAにおいて、80%以上の達成率の児童が 90%以上」を目指す。「診断テストA」が 80%以上とれた児童に対しても、学期の初めに 1 回診断テストを受けさせるようにし、確かな学力の定着ができていないかを確認する。

算数科の授業改善策

- 文章題の意図を捉え、既習の知識を活用して問題を解く力を付けるために

低学年	<ul style="list-style-type: none"> 具体的操作を行い、問題場面をしっかりとらえさせる。問題文を絵や図で表すことによって理解を深め、式と結び付けられるようにする。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 文章題の中から、分かっていることと求めることを明確にしてから問題を解くようにするとともに、問題場面がとらえられているか説明活動を大切にする。 立式の根拠を説明させるようにして、既習の知識との結びつきを強める。 文章題に表現されている状況を絵や図などで表し、意図を正しく捉えられるようにする。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 児童が自ら問題を解決する授業を行う中で、既習の学習内容を振り返り、自分がもつ知識と結び付けながら見通しをもって解決できるようにする。 絵・図・線分図・数直線・表・グラフ・式とを結び付けてとらえられるようにする。

- 自分の考えを、立式の根拠を明らかにしながら表現する力をつけるために。

低学年	<ul style="list-style-type: none"> 具体的操作を通して、式への理解を深め、式を説明する活動を授業の中に組み入れていく。絵や図を使用して式を説明できるようにする。既習事項を生かして問題解決できるようにする。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 絵や図を用い、立式の根拠を分かりやすく説明できるようにする。 既習事項を用いて説明できるように、類型の問題を振り返る機会を設ける。 正しい用語を用いて説明できるようにする。説明する機会を多く設ける。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 文章題の数量関係を、児童の実態に応じて線分図や数直線、具体物を活用しながら捉えさせ、解決の見通しをもたせる。根拠を明らかにしながら演算決定や単位換算の処理を適切に行うことができるようにする。

- ・数量や図形について、知識理解を確実に定着させるために

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・興味をもてるような教材の工夫をし、具体物の操作をしたり、体験的活動を取り入れたりする。授業やクオリティータイムで既習事項についての確認を行い、ミニテストなどで確実に定着させる。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい単元に入る際に、既習事項の確認をする。 ・用語を正しく使えるように、用語を用いて説明するようにさせる。また、説明する機会を授業中に多く設ける。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を振り返りながら、新しい学習との違いを明確化するようにする。 ・意味の理解の伴った知識を身に付けさせるため、説明する活動を取り入れるようにする。知識・理解が定着したかどうかを確認する復習タイムを設ける。

- ・測定や作図を正確に行う力を付けるために

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・直接比較や間接比較の作業的・体験的な活動を多く取り入れ、単位の必要性やよさに気付かせる。定規を用いて物の長さを正確に測定したり、直線を引いたりすることを繰り返し行うことにより習熟させる。日常生活の中で実際に単位を使用したり、量を測定したりすることにより、感覚を養う。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・長さや重さ、かさについて児童な身近な生活の中での量感を大切に指導をする。目的に応じて単位や計器を適切に選択して測定できるようにする。 ・円や三角形、角度についての興味関心を高めもコンパスや分度器による作図に習熟できるように繰り返し学習に取り組む。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・作図の方法に応じて適切に道具を選択し、それらを正しく操作する活動を繰り返しながら作図や測定の精度を高める。作図法の根拠を明らかにしながら授業を展開する。

社会科

社会科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<取り組みにおける成果と課題>

- ・具体物の提示や写真資料・映像資料の活用など資料の工夫をしたりしたこと、見学や調査などの体験的な活動を設定したことで興味・関心が高い児童が多い。
- ・調べた社会的事象を比較・関連させて考えることができる児童が増えてきたが、継続して表現活動を取り入れていく必要がある。
- ・グラフや表、地図記号など、抽象化された資料を正しく読み取り、活用する力を高める必要がある。

社会科における調査結果の分析

領域・内容別結果の分析	<ul style="list-style-type: none">○4～6年生でどの領域・内容においても、目標値や区平均正答率を上回り、どの領域、内容においても、2ポイントから10ポイント程度上回っている。○昔のくらしの様子に関する問題では、100%正解している児童と正解していない児童の差が激しい。特に、記述問題が弱い。○安全な暮らし―家事―は正答率がやや低い傾向にある。相手の話を正確に聞き取り、言葉で表現することが苦手と考えられる。消防の施設や設置状況について、目的を考察する力が低い傾向にあり、理由や工夫、原因などを資料と関連付けて考察する力を付けていく必要がある。○日本の農業の領域の「年間を通した米づくりの様子について、農作業に使われる機械とともに把握している」という問題については、5ポイント下回っている。工業生産の領域では、自動車の制作工程におけるプレス機の理解については、22ポイントも大きく下回った。また、太平洋ベルトについても18ポイントと大きく下回っている。
観点別結果の分析	<ul style="list-style-type: none">○「社会的事象への関心・意欲・態度」<ul style="list-style-type: none">・4～6年生で目標値、区平均を上回っており、社会的事象への関心は良好である。○「社会的な思考・判断・表現」<ul style="list-style-type: none">・4～6年生で目標値、区平均を上回っている。資料をもとに社会的事象の意味を考えたり、問題点について考えたりすることができるようになっている。記述自体を苦手とする児童や、的確な言葉を使って表現できない児童がいる。○「観察・資料活用の技能」<ul style="list-style-type: none">・4～6年生で目標値、区平均を上回っているが、個人差が大きい。○「社会的事象についての知識・理解」<ul style="list-style-type: none">・目標値を7～9ポイント上回っていておおむね良好である。

調査結果に基づいた授業改善のポイント

1. 年間を通して知識の定着を図る。

社会的事象についての知識・理解において目標値を大きく下回った項目が多い。知識をきちんと定着させ、正しい答えを導けるようにさせたい。そのため、練習プリントやミニテストなどを行うようにして、知識の確実な定着を図る。

2. 社会的事象の特色や相互の関係、社会的事象の意味を考える指導の充実を図る。

分かったことを比較したり関連付けたりして考える際には、「目的や手段」や「原因と結果」などの関係から考えさせる発問を行う。

3. 予想を立てたり周囲と話し合ったりする事で、思考力・判断力の育成を図る。

「なぜ〇〇をするのか」「なぜ〇〇なのか」といった、理由を考える機会を多く作り、児童それぞれが自身で考える機会とする。また、周囲と考えを交流する事により、話し合いに慣れ、自分の考えを分かりやすく相手へ伝える力を育んでいく。

4. 必要な情報を正確に取り出す力を高める。

読み取る力を伸ばすために、資料から分かる事を個々で考えさせた上で全体で共有する。個人では気付かなかったことを友達の力を借りて気付く事で、どんな点に気を付けて資料を読めばいいのか慣れていく。

社会科の授業改善策

・ 関心をもって学習に取り組めるようにするために

中学年	<ul style="list-style-type: none"> 生活との結び付きに重点を置き、導入や資料を工夫して学習意欲を高める。 児童の疑問や問いをもとに課題を作り、見学、調査などの体験的な活動を効果的に設定し、問題解決的な学習への関心・意欲を高める。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 具体物の提示や写真資料・VTR資料などの適切な場面での活用を通して、社会的事象を正確に捉え、課題意識を高めていく。 課題解決に向けての意欲を保つために、「児童の疑問や思いから生まれた学習問題」を設定し、児童が問題解決的な学習を進められるよう指導する。

・ 調べた事実をもとに考え、表現できるようになるために

中学年	<ul style="list-style-type: none"> 調べて分かったこと、気が付いたことをもとに、自分の考えをもつための時間を十分に確保する。 児童が意見や疑問を出し合い、お互いの考えを伝え合う場を設定する。 単元のまとめに新聞やパンフレット作りなどの活動を取り入れる。内容に「自分にできること」などを入れ、自分の生活と関わることを意識して考えさせる。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 読み取った資料をもとに考える時間を保証する。 自分の考えを記述や発言を通して表現する活動を意識的に行う。また、伝え合う活動を設定し、互いの考えを深められるようにする。 単元のまとめに新聞やポスター、討論形式の話し合いなど自分の考えを明確にして表現する活動を取り入れる。「自分にできること」「よりよい社会にしていこうために必要なこと」など、社会参画を意識した考えがもてるよう指導する。

・ 表やグラフなどの資料を読み取る技能を高められるようにするために

中学年	<ul style="list-style-type: none"> グラフや地図を見るポイント（表題・単位や数値・全体の特徴など）を示し、継続的にグラフや地図を読み取る活動を取り入れる。 授業のねらいに合わせてグラフや写真などの資料を選定する。 資料から分かることを正確に読み取り調べる場を設定する。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> グラフや地図を見るポイント（表題・単位や数値・全体の特徴・部分の変化など）を示し、継続的にグラフや地図を読み取る活動を取り入れる。また、複数の資料を比較したり、関連付けたりしながら読み取る活動を意識して取り入れる。 各単元で統計資料、地図資料を取り上げ、読み取った内容から自分が必要とする内容を選択し、活用できるよう指導する。 資料から分かることを整理し、全体で確認する場を設定する。

・ 学習内容の定着を図るために

中学年	<ul style="list-style-type: none"> 地図や地図記号に関わる指導を継続して取り組み、地図記号や方位、都道府県名などについての定着を図る。町探検などで分かったことを、地図にまとめたり、分かったことや考えたことを、地図を活用して説明したりする中で定着できるようにする。 調べたことをノートに書く、単元のまとめで欠かせない知識をキーワードにまとめさせるなど、大事な用語を児童が書く機会を設ける。 各単元の中で身に付けさせたい知識を教師が明確にし、指導計画を立てる。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 地図帳を使う学習活動を意図的に取り入れ、学習内容の理解に結び付ける。分かったことや考えたことを、緯度経度や大陸海洋などの用語を使って説明するなど、活動の中で積極的に利用し、定着させる。 毎時間、課題に対して調べて分かったことを、キーワードに整理しながらまとまりのある文章にまとめる活動を取り入れ、知識を再構成させ定着を図る。 各単元の中で身に付けさせたい知識を教師が明確にし、指導計画を立てる。

理科

理科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<取り組みにおける成果と課題>

- ・問題解決的な学習を重視し、比較実験の条件設定や課題を明確にすることでグループやクラス全体で実験方法を考え、実験計画を立てる場面が見られるようになった。
- ・実験、観察の時間を確保することで実験に意欲的に取り組み、正確な技能が身につけてきているが、結果を予想したり、科学的に思考し記録したりまとめたりすることに慣れていない。
- ・実験や観察などにおける思考や表現、知識・理解に個人差が大きくなってきていることは課題である。

理科における調査結果の分析

領域・内容別結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ○『生命・地球』『物質・エネルギー』の2領域とも正答率は平均で目標値・区平均正答率を上回っているが、2領域とも全学年において前年度校内平均正答率より下回った。また、記述で答える問題が弱い。 ○4年生では、ほとんどの領域で目標値・全国平均を上回っているが「電気の通り道」に関しては全国平均を若干下回った。 ○5年生では、「一年間の生物の成長」と「動物の体のつくりと運動」が目標値に比べて10点低くなっており、苦手の傾向にある。 ○6年生では、特に「流れる水のはたらき」「電流のはたらき」「ふりこのきまり」は正答率が低い。
観点別結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ○「自然現象への関心・意欲・態度」 目標値、区平均、全国平均を上回っており、概ね良好と思われる。今後も、授業の中で事象提示や導入を工夫するなどして、「関心・意欲・態度」を高めていく必要がある。また、身の回りの自然環境にも目を向けていけるようにする必要がある。 ○「科学的な思考・表現」 どの学年も、目標値、区平均、全国平均を上回っており、概ね良好と思われるが、昨年度の校内平均正答率よりも数値が下がっている。 ○「観察・実験の技能」 目標値、区平均、全国平均を上回っている学年と、区平均、全国平均をやや下回っている学年とに分かれる。 ○「自然事象についての知識・理解」 目標値、区平均、全国平均を上回っており、概ね良好と思われるが、昨年度の校内平均正答率よりも数値が下がっている。

調査結果に基づいた授業改善のポイント

1. 理科への関心をさらに高める必要がある。
→ 今後も、事象提示や導入を工夫するなど「関心・意欲・態度」を高めていくことを大切にし、児童が自ら課題を見いだすことができるように工夫する。
2. 筋道立てて考察する科学的思考力を高める。
→ 事象提示→課題設定→予想→実験計画→実験→結果→考察（結論）の学習過程を定着させる。実験を行う際に根拠を明確にして予想を立てたり、絵やモデル図を活用したりして分かりやすく考察をまとめたりして思考する力を高める。
3. 観察・実験の技能をさらに定着させていく必要がある。
→ 視点を与え、計画を立て、見通しをもった実験・観察ができるようにする。また班の中での役割分担などについても指導し、一人一人が技能を身に付ける機会を得られるようにする。さらに表やグラフを正確に読み取る力を育てる。
4. 自然事象についての理解をさらに深めていく必要がある。
→ 実験・観察の時間を十分に確保し丁寧に内容を押さえながら学習することで、実感を伴った理解ができるようにする。理科用語を用いて学習内容をまとめるなど、振り返りを十分に行って知識を定着させる。学習したことを生活と結びつけて考えさせることで理解を深めるようにする。

理科の授業改善策

・理科への関心をさらに高めるために

中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の身近な疑問から課題を設定し、学習計画を立てる。児童の発想や思いを大切にしたい実験方法をもとに授業を進める。 ・校内の自然環境や理科室の掲示物、器具の整備を充実させる。 ・教室に四方位の掲示を行うことで、方向の感覚を養う。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・導入はこれまでの生活体験や既習事項に関連づけて、自分なりの課題を見い出せるようにする。校内の自然環境や理科室の整備を充実させる。「おもしろ理科実験教室」などを有効的に利用する。 ・実際に植物や生き物を育てる体験を豊かにする。

・科学的な思考をさらに伸ばすために

中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・児童自身が既習の学習内容を生かして予想したり、説明したりする場を設定する。友達の考えと自分の考えを比較し、結果をまとめながら考えられるようにする。 ・課題→予想→実験・観察→結果→まとめという学習過程を意識できるようにする。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・事象提示→課題設定→予想（仮説）→実験計画→実験→結果→考察（結論）の学習過程を定着させる。 ・既習事項や生活体験を根拠にして予想（仮説）をもてるようにする。 ・ノートやワークシートにまとめる力を育てる。 ・筋道立てて考え、より活発な話し合いの中で、知識を再構築する力を養う。

・観察・実験の技能をさらに定着させていくために

中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・観察の観点や方法を提示して、細かい変化にも目を向けられるようにする。理科室の使い方から実験器具の安全で適切な扱い方までの基本的な技能を定着させる。また、身近にあるものを活用して実験を行う経験を増やす。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・視点を明確にもたせ、自ら見出した方法や手順で多面的な観察・実験を行い、正確に記録したり自分の言葉で表現したりできるようにする。さらに表やグラフを正確に読み取り、正しく理解できるようにする。 ・見通しをもって予想や仮説を立てさせ、それらを振り返り妥当性を検討する。班の中で協力して実験・観察に取り組む時間と個人の活動の時間を確保する。

・自然事象についての理解をさらに深めていくために

中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎基本の定着が図れるよう、生活科や日常使っている言葉から、理科で使う言葉への移行を確実に挙げる。 ・授業の流れ(問題把握・観察・実験・気づきの発表・一般化)をていねいに積み重ね、生活経験と結びつけて知識の定着をはかる。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・発展的に知識を広げ深められるよう、子供たちの興味関心に根ざした問題解決学習に取り組ませる。また、児童が互いの知識を伝え合う場を設定するなど、既習事項の確認と復習をくり返し挙げる。実生活との結びつきからも学習内容を振り返り、事象の特色を把握し定着できるようにする。

体育科

体育科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<p><取り組みにおける成果と課題></p> <ul style="list-style-type: none">・一校一取組と関連させて、授業の始めの3分間走や持久走、短縄に積極的に取り組んだ。持久走月間、短縄月間の活動にも力を入れた。前年度のスポーツテストの結果を受けて、体力向上をめざして全学年で系統立った取り組みを行うことができた。・手洗い、うがいや悩んだ時には周りの人に相談する等、心と体の健康について意識と理解の高まりが見られる。・意欲的に体を動かす児童は、授業でも休み時間でもよく動かす。逆に運動を得意としない児童は、授業ではある程度体を動かしていても、休み時間は体を動かしていない。運動量の差が激しくなっている傾向は、高学年になるほど強い。・校内研究を通して、教員の授業力向上とともに児童が互いにかかわり合いながら体力・技能の向上が図れるようにしたい。

体育科における分析

観 点 別 の 分 析	<ul style="list-style-type: none">○運動や健康・安全への関心・意欲・態度<ul style="list-style-type: none">・運動に対し意欲的に取り組む児童は多い。休み時間も多くの児童が外遊びを行っている。・高学年では、すすんで運動に取り組もうとする児童と自ら身体を動かさそうとしない児童に分かれる。○運動や健康・安全についての思考・判断<ul style="list-style-type: none">・チームで作戦を立てる事に関しては、よく取り組んでいる。・自己の能力を把握し、適切に自分自身のめあてを設定することができない児童がいる。○運動の技能<ul style="list-style-type: none">・日頃の運動量や意欲から、技能に個人差が見られる。・特定の運動のみ得意で、他の運動は不得意という児童が見られる。・大きなボールを両手でつかんで投げる児童が目立つ。正しい腕の使い方、投げ方が定着していない児童が多い。○健康・安全についての知識・理解<ul style="list-style-type: none">・実感を伴った理解が不十分なため、知識と感覚が一致していない児童がいる。
----------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

授業改善のポイント

<ul style="list-style-type: none">○運動や健康・安全への関心・意欲・態度<ul style="list-style-type: none">・自分の取り組みが力になっていることが実感できるよう工夫をして、意欲や関心を高めていく。 (記録の計測、学習カードの活用、友達との教え合いなど)・オリンピック・パラリンピックに関する学習を通して、運動への意欲・関心を高めていく。○運動や健康・安全についての思考・判断<ul style="list-style-type: none">・学習カードを活用して自分なりのめあてをもち、取り組みを工夫する活動を重視する。具体的なめあてをもち、動きを工夫している児童を称賛し、全体で共有しながら授業を展開する。・伝え合う運動のコツを示した上で、児童が互いに学び合う時間を授業に取り入れる。○運動の技能<ul style="list-style-type: none">・運動量を確保し、運動の特性に触れながらたくさん体を動かせるようにする。・よい動きをできるだけ明確にし、全体で共有しながら授業を展開する。○健康・安全についての知識・理解<ul style="list-style-type: none">・自分の生活と結び付けられるように自分の経験と関連させることで、実感を伴った理解となるようにする。・内容によっては教員の体験や経験を織り交ぜながら授業を進め、児童が安心感をもって理解を深められるようにする。

体育科の授業改善策

・運動や健康・安全への関心・意欲・態度

低学年	<ul style="list-style-type: none"> 授業では、様々な運動遊びを楽しめるように活動内容や授業展開を工夫する。また、体育朝会や運動委員会主導の活動を授業の中にも取り入れる。 運動の特性や学年の実態に合わせてルールや場の設定を工夫する。 めあてをもつことや関わりを大切に、仲良く楽しく運動に取り組めるようにする。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 多様な運動を楽しめるように活動内容や授業展開を工夫する。また、体育朝会や運動委員会主導の活動を授業の中にも取り入れる。 運動の特性や学年の実態に合わせてルールや場の設定を工夫する。 グループやチームでめあてをもち、関わりを重視して活動を工夫し、技能や体力を高めるようにする。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 多様な運動の楽しさを味わい、技能や体力を高められるように活動内容や授業展開を工夫する。また、体育朝会や運動委員会主導の活動を授業の中にも取り入れる。 運動の特性や学年の実態、活動の系統性を意識してルールや場の設定を工夫する。 グループやチーム、個人でめあてをもち、関わりを重視して活動を工夫し、技能や体力を高めるようにする。

・運動や健康・安全についての思考・判断

低学年	<ul style="list-style-type: none"> 活動の振り返りを大切に、取り組みを工夫しようという気持ちをもたせる。 友達のよい動きを見て、真似したり工夫したりする意識をもたせ、全体で共有しながら授業を展開する。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 学習カードを活用して、ねらいに合わせて自分なりのめあてをもち、達成するための取り組みを考える活動を重視する。 具体的で適切なめあてをもち、動きの工夫の仕方についてよい取り組みをしている児童を称賛し、全体で共有しながら授業を展開する。 具体例を示して、児童同士の励まし合いや学び合いの中で動きを工夫できるようにする。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 学習カードや体育ノートを活用して、ねらいに合わせてチーム・グループ・個のめあてをもち、取り組みを工夫する活動を重視する。 具体的で適切なめあてをもち、動きの工夫の仕方についてよい取り組みをしている児童を称賛し、全体で共有しながら授業を展開する。 具体例を示して、児童同士の教え合いや学び合いの中で自ら動きを工夫できるようにする。

・運動の技能

低学年	<ul style="list-style-type: none"> 様々な運動経験ができるようにする。友達の真似をしたり工夫をしたりしてたくさん体を動かせるようにする。 一校一取組では持久力向上をめざし、2分間走に継続して取り組むと同時に、授業の主運動につながる導入の運動を行い、児童が互いに関わり合いながら多様な運動経験を積めるようにする。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> めざす動きを具体的に、目標をもって取り組めるようにする。教員同士の情報交換や実技研修からよい動きのポイントを明確にし、言葉かけの引き出しを増やす。 一校一取組では持久力向上をめざし、3分間走に継続して取り組むと同時に、授業の主運動につながる導入の運動を行い、児童が互いに関わり合いながら多様な運動経験を積めるようにする。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 運動の結果を記録化、数値化することで、目標をもって取り組めるようにする。教員同士の情報交換や実技研修から、多様な技や動きのポイントを明確にし、言葉かけの引き出しを増やす。 一校一取組では持久力向上をめざし、3分間走に継続して取り組むと同時に、授業の主運動につながる導入の運動を行い、児童が互いに関わり合いながら多様な運動経験を積めるようにする。

・健康・安全についての知識・理解

低学年	<ul style="list-style-type: none"> 生活の中の基本的な生活行動様式（手洗い・うがい、廊下の歩行等）を定着させ、健康な生活について意識を高める。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 自分の体の健康についてこれまでの成長や生活を振り返り、具体的に理解できるようにする。そのために資料を工夫したり、簡単な実験を取り入れたり、ゲストティーチャーの話を聞いたりして実感しながら学習できるようにする。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 心と体の健康について科学的に理解し、日常生活に生かせるようにする。そのために資料を工夫したり、簡単な実験を取り入れたり、自分の経験を振り返ってロールプレイングで行動選択の場面をつくったりして授業を展開する。

音楽科

音楽科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<取り組みにおける成果と課題>

- ・歌唱活動に意欲的に取り組むことのできる児童が増えてきた。
- ・器楽活動では、技能が十分に習熟できていないことにより、表現が高まらなかった児童もいた。
- ・鑑賞では全体を聴くだけでなく、部分的に取り上げることで特徴や構成などの諸要素に気付き、楽しみながら聴くことができた。また、感じたことを言葉で表現することができる児童が増えてきた。

音楽科における学習状況の分析

観点別結果の分析

○音楽への関心・意欲・態度

意欲的に取り組み、授業だけではなく音楽朝会などでも生き生きと歌ったり、演奏したりして楽しみながら学習している児童が多い。しかし、好きな学習内容はすすんで取り組むが、苦手なものや興味がないものは消極的になってしまう児童も見受けられる。

○音楽表現の創意工夫

器楽では、曲想にふさわしい表現を試行錯誤することが徐々にできるようになってきた。歌唱においても、思いや意図をもって聴き手に伝えようとしたり、気持ちを込めて歌ったりする姿が多く見られるようになってきた。

○創造的な技能

歌唱活動では、呼吸や発声を工夫し、自然で無理のない声で伸び伸びと歌う児童が増えてきた。リコーダーにおいては個人差が大きく、技能が十分に身に付いていないため、自分の思い通りに表現できない児童もいる。

○鑑賞の能力

音楽を楽しみながら聴き、音楽を特徴づけている諸要素に気付くことが徐々にできるようになってきた。また、感じ取ったことを自分の言葉で表現することができる児童も増えてきた。

音楽科における授業改善のポイント

○音楽への関心・意欲・態度

→楽曲に対して思いや意図をもって取り組み、友達と協力しながら主体的な活動ができる題材を設定する。
また器楽活動においては、スモールステップと個別指導の充実を図り、「わかった、できた」と感じることができる授業づくりに努める。

○音楽表現の創意工夫

→自分の思いや意図が表現できるよう楽譜を深く読み取る活動を多く取り入れる。また、友達の表現を互いに聴き合ってそのよさを見付け、自分の表現に生かす活動を設定する。さらに、体の動きを伴った歌唱活動や鑑賞活動をしたりするなど様々な活動を工夫し、感じ取る体験を積み重ねる。

○創造的な技能

→簡単に取り組める短い曲を使い、基礎的な歌い方や楽器の奏法をしっかりと身に付けさせる。

○鑑賞の能力

→旋律の反復や変化、音楽を特徴づけている諸要素に気を付けて聴くことができるようにする。また感じ取ったことを自分の言葉で表現出来るように、様々な場面で曲想に合った語彙を提示していく。

○音楽への関心・意欲・態度

低学年	一人一人が意欲的に歌ったり楽器を演奏したり、音楽を聴いて心から楽しめる魅力のある教材を取り上げる。また、楽曲の気分に関わり全体で反応するなど、児童が夢中になって取り組むことができるような活動を工夫する。
中学年	音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取りやすい魅力のある教材を取り上げる。また、協力して音楽表現することができるような活動を工夫する。
高学年	学習によって得た知識や技能を活用しやすく音楽的にも魅力ある教材を取り上げる。よりよい表現をつくり上げるために創意工夫を凝らしたり、集団の中で協力し合って一つのものを作り上げたりする活動を工夫をする。

○音楽表現の創意工夫

低学年	歌詞の中に登場する人物や動物になりきって歌ったり、感じ取ったことや想像したことを言葉や体で表現したり友達と伝え合ったりしながら表現を豊かにする活動を多く取り入れる。表現を工夫する手がかりを常に音楽の中に求める習慣を身に付けるとともに、感じ取ったことを基に様々な表現の工夫を試す体験を積み重ねる。
中学年	歌詞の内容からイメージを膨らませて気持ちを込めて歌い、旋律の流れの中で、フレーズや強弱の工夫ができるようにする。また表現を互いに聴き合ってそのよさを発見したり、体の動きを伴った活動をしたりするなど様々な活動を工夫し、感じ取る体験を積み重ねる。
高学年	一つ一つの言葉の意味を理解して歌ったり、歌詞のもつリズムや言葉の抑揚に気を付けながら発音に気を付けたりして気持ちを込めて歌うことができるようにする。また音楽を形づくっている要素を生かした表現の仕方について考えたり試行錯誤を重ねたりしながら、思いや意図をもって表現する方法を考える。

○創造的な技能

低学年	歌唱では自分の歌声や発音に気を付けるとともに、互いの歌声や伴奏をよく聴いて、声を合わせて歌うように指導する。器楽では鍵盤ハーモニカの運指や息の使い方に関心を付け、拍の流れの順に演奏できるようにする。また身近な楽器に親しみ、音色に関心を付けて簡単なリズムや旋律を演奏する活動を通して、楽器の基本的な奏法を身に付けさせる活動を取り入れていく。
中学年	歌唱では呼吸や発音に関心を付けて無理のない自然な声で歌うように指導する。器楽では簡単に取り組める曲で、リコーダーや鍵盤ハーモニカの運指やタンギングを確実に身に付けさせる。また、低学年で未経験の楽器にも親しみ、様々な楽器の基本的な奏法も身に付けられるよう合奏活動を充実させていく。
高学年	歌唱では表現にふさわしい呼吸や発音の仕方を工夫して、柔らかく豊かな響きをもった歌声へと指導する。児童の実態に合わせた合奏曲の選択をし、その中でリズムや主な旋律、副次的な旋律や和音など音楽を形づくっている要素に着目し、よりよい音楽表現を目指していくよう指導していく。

○鑑賞の能力

低学年	親しみやすい楽曲を選択する。音楽を聴いて感動する体験を増やし、気分を感じ取ったり、音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取ったりすることができるような学習活動や教材選択の工夫をする。
中学年	親しみやすく音楽を形づくっている要素の働きが生み出す音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取り、聴く楽しさを味わうことのできる楽曲を選択する。また、曲想の変化を感じ取って聴く活動を取り入れる。
高学年	音楽を形づくっている要素の働きが生み出す音楽のよさや面白さ、表現の豊かさを味わうことのできる楽曲を選択する。また、合唱、合奏を含めた様々な種類の楽曲を取り入れて、聴く喜びを深める活動を充実させていく。

図画工作科

図画工作科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<取り組みにおける成果と課題>

- ・造形活動に意欲的に取り組むことのできる児童が増えてきた。
- ・自分の思いを表現するのに経験が乏しく、指の巧緻性の低い児童が多い。紙などをちぎったり土を練ったり、ひもを結んだり、木工道具を使う等々。
- ・作品の鑑賞カードを書くことで、机間指導だけでは見取れない子供の思いを知り、それを実現していくための手立て等の支援や評価に生かすことができた。
- ・表現活動中にミニ展覧会を設定することで友達や自分の良さに気づき肯定的なコミュニケーションが生まれたり、自分の表現に生かしたりする姿が見られた。

図画工作科における調査結果の分析

<p>領域・内容別結果の分析</p>	<p>A表現(1) 「造形遊び」 夢中になり心を開いて活動する姿が多く見られる。材料の特徴からいろいろな発想で活動に取り組むことができている。また、友達と関わりながら表現する楽しさを味わうこともできる。しかし中には、制作の見通しが立たないと不安になり、材料を目の前にして何をしたいかイメージが広がらず、固まってしまう児童も見られる。</p> <p>A表現(2) 「自分の思いを絵や立体で表現する」 絵で表すは身近なできごとや校庭の描写等、テーマをもとに想像を広げながら表す題材を各学年に設定する必要がある。立体に表すでは生活の中で感じたことや「12年後の私」等の想像したことを表す題材を設定する必要がある。児童はものの質感と深く関わる体験が不足している。絵、立体共に十分に材料に触れながら、思い付いたことを表す題材を設定する必要がある。</p> <p>B鑑賞 友達の作品や芸術作品からそのよさや美しさを感じ取ったり、表現の特徴や表し方の変化などをとらえたりすることができている。そこから自分の表現を振り返って工夫する姿も見られる。授業だけでなく、日常的に美術作品に興味をもって見たり、作品を大切にしようとしたりする態度も身につけていく必要がある。</p>
<p>観点別結果の分析</p>	<p>○造形への関心・意欲・態度 児童が興味をもって活動に取り組めるように、題材名を工夫したり様々な材料を扱ったりすることで、意欲的に楽しんで取り組む姿が見られた。しかし、最後まで自分らしく工夫して作品を完成させることに意欲が続かない児童もいる。</p> <p>○発想や構想の能力 想像力を働かせ、自分なりに工夫しながら表し方を考えたり構想したりしている。しかし中には、完成形を求めすぎて失敗を恐れる児童もいる。材料の特徴や題材から柔軟にイメージを広げて表現に結び付けていく力をさらに身に付けさせていきたい。</p> <p>○創造的な技能 多くの児童は表現したいことに対して、材料や用具を工夫して使うことができる。手や体全体の感覚をうまく働かせることができず、自分の思い通りに表現できない児童や、材料や用具を幅広く使えない児童がいる。また、道具・用具を安全に使えても、片付けまできちんと取り組むめない児童、道具・材料など大切に扱う態度が育っていない児童もいる。</p> <p>○鑑賞の能力 自他の作品のよさに気づき認め合うことができている児童が多い。しかし、色や形、イメージの特徴を捉えて感じたことや思ったことを自分の言葉で発言したり書いたりすることが苦手な児童もいる。</p>

調査結果に基づいた授業改善のポイント

○造形への関心・意欲・態度	表現する楽しさを感じ、造形活動に進んで取り組めるように、心を開くような題材(材料)を意識的に扱う。表現活動はスモールステップで確実にできること増やし、つくりだす喜びを感じられるような題材を取り上げる。
○発想や構想の能力	テーマや材料からどんなことができるかイメージを広げて友達と共有するような場面に設ける。
○創造的な技能	体の諸感覚を意識して働かせるような題材を取り入れる。道具の基本的な扱い方を身に付けさせる。
○鑑賞の能力	身近な造形作品の良さを自分の言葉で発表したり、書いたりする活動を取り入れる。

図画工作科の授業改善策

- ・進んで表現や鑑賞をすることを楽しみ、つくりだす喜びを味わうことができるようになるために

低学年	個々の表現のよさを賞賛し、自信をもって活動できるようにする。制作時に相互鑑賞の機会を設けて、自分の表現に生かすようにする。
中学年	個々の思いを伸び伸び表現させるために、題材に幅をもたせる。材料や道具を十分に用意する。また、自分で描画材や材料を選択できる場面を設ける。
高学年	自分を見つめたり、心を開くような題材(材料)を多く取り入れ、表現するおもしろさや喜びを味わえるようにする。表現活動ではつくりあげる喜びを感じられるような題材を取り上げる。

- ・材料や感じたことを基に想像力を働かせ、表し方やつくり方、美しさなどを考えることができるように

低学年	テーマや材料のことについてクラス全体で話し合い、イメージをもって活動に取り組めるようにする。言葉で表したり、楽しさを想起させたりしてから表現活動に入り、児童の思いを尊重して進められるようにする。
中学年	テーマや材料の色や形、イメージのどれかに着目させ、イメージを広げるようにする。一人一人の感じ方やよさを認める。発想を広げる段階で、どんなことができるか体験できる時間を設ける。
高学年	発想や構想の段階で友達と話し合う機会を設け、イメージを広げたり、深めたりするようにする。また、表現活動中に作品を見合う機会を設け、発想、構想を広げる手がかりになるようにする。

- ・造形の基本的な技能を伸ばし、表したい意図に応じ、体の感覚や技能を生かして表現できるように

低学年	道具の扱い方、安全への指導を徹底しながら、紙や身边材などの材料を中心に扱い、手・指先を使う経験を多くさせる。
中学年	厚紙や段ボール、板材などの材料を中心に、カッター、金槌、のこぎり、彫刻刀、ボンド、木工接着剤などを扱う機会を多く取り入れ、その特性に慣れる。
高学年	電動のこぎりや、低・中学年で経験した用具・材料を使い、表現に適した方法や材料を選び、工夫ができる題材を設定する。道具の適切な使い方を身に付けるため復習の機会を設ける。複数の表現要素を取り入れ、表現方法に幅をもたせる。

- ・造形作品のよさや美しさなどに気付き、感じ取ってみることができるように

低学年	授業の中で、児童の作品のよさや工夫を紹介し、いろいろな表し方に気付けるようにする。友達と作品を見せ合う時間を設ける。
中学年	友達同士で作品を見合う機会を設ける。鑑賞したときには、言葉でそのよさを発表する(話す)機会を設ける。
高学年	授業において、友達の作品や芸術作品に関わる様々な鑑賞ができるようにし、よさを言語で表す機会を設ける。アートカードを用いた鑑賞の授業を行う。

家庭科

家庭科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<p><取り組みにおける成果と課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭生活に興味をもち、実践的・体験的な学習を生かして日々の生活に主体的に関わろうとする関心や態度は高まっているが、自ら課題を見出し解決を図る問題解決的な学習の充実をより一層図る必要がある。 ・家庭生活について家族と話したり、児童同士で発表し合ったりすることで、生活に必要な知識は習得できたが、実際の生活の中で工夫するまでには至っていない。 ・学習の中で習得した知識や技能を、生活の場に十分生かしているとは言えない。日常生活において経験する場を多くし、繰り返し学習していく必要がある。

家庭科における調査結果の分析

<p>領域・内容別結果の分析</p>	<p>A 家庭生活と家族 家庭には自分や家族の生活を支える仕事があり、自分が家族に支えられていることに気付いて、感謝の気持ちをもっている児童が多い。しかし家族と触れ合ったり仕事を引き受ける時間が見付けたりできないのが現状である。</p> <p>B 日常の食事と調理の基礎 栄養教諭・栄養士との学習の場を設け、日常の食事の大切さや、栄養バランスについて学び、栄養について詳しい知識がある。調理の技術については家庭で調理に向かう経験も個人差が大きく、繰り返し経験して安全に手際よく作業ができる力を身に付けさせていきたい。</p> <p>C 快適な衣服と住まい 衣服や住まいについては、日常生活において特に意識して関心をもったり、工夫したりする機会が少ない。学習を通して知識や技能を習得し、生活に生かそうとする姿が見られる。また、手縫いでは技能の差が大きく、授業時間に終わらない児童もいるため個別指導が必要である。</p> <p>D 身近な消費生活と環境 環境に配慮した生活の工夫については、他教科での学習や家庭生活、情報メディア等から得た知識をもとに、実践している児童が多い。また、金銭の大切さや計画的に消費することを学ぶことでこれからの生活に役立てていきたいという意欲が育ってきた。</p>
<p>観点別結果の分析</p>	<p>○家庭生活への関心・意欲・態度 調理実習や小物作りなどの実践的・体験的な活動に対する関心は高く、楽しく実習や製作活動などを行っている。家庭に帰って学校で学んだことを実践していく課題への取り組みについては個人差が大きい。また、家庭で実践したり、調べたりする課題になかなか取り組めない児童もいるため家庭との連携が課題である。</p> <p>○生活を創意工夫する能力 家庭生活を見直し、生活の課題を工夫しようとする姿勢は見られるが、実生活に生かしたりする力を育てることが課題である。一方で、家族と触れ合ったり、協力して家庭の仕事をしたりする時間を十分に確保することが難しく、経験の積み重ねから工夫につなげることが十分とはいえない。</p> <p>○生活の技能 児童一人一人の生活経験により差があるが、学習の中で習得した知識と技能を生活の場で生かそうとする姿勢が感じられ、調理や裁縫・掃除などの技能に個人差が大きい。</p> <p>○家庭生活についての知識・理解 家族にやってもらったり、やるのを見ていたりすることはあっても実際にやってみた経験は少なく授業を通して新たに知識を習得して身に付けていることが多い。実生活の中で繰り返し実践する機会が少なく、定着に結び付いていないところもある。</p>

調査結果に基づいた授業改善のポイント

○家庭生活への関心・意欲・態度

実践的・体験的な活動を今後も多く取り入れ、日常生活と授業内容との関連を図り、意欲や関心を高め、実生活での実践への意欲を育てるようにする。

○生活を創意工夫する能力

自分の生活を見つめ直したり、振り返ったりする活動を通して、家族をはじめ、人と関わる経験を増やすようにする。

○生活の技能

技能を定着させるために、授業でしっかりと基本を押さえた技術を学び、家庭で繰り返し実践する機会をつくる。

○家庭生活についての知識・理解

身に付けた知識を実践することで、確実な定着を図る。

家庭科の授業改善策

・家庭生活への関心・意欲・態度

家庭生活の中から教材を選んで学習を行うが、新鮮さを感じる教材を選び意欲をもって学習に取り組めるようにする。また、児童が意欲的に向かう製作や実習を通して作り上げる喜び、できるようになったという達成感をもたせ、更なる意欲につながるようにする。

・生活を創意工夫する能力

自分の生活を見つめ直し、課題を見付け、解決しようと考えることが、生活を工夫する力につながる。従って、現状をふまえた上で、よりよい方法はないか、工夫の仕方はないかといったことを、常に意識して活動に取り組むようにさせる。また、実践したことが受け入れられ、評価されることで、工夫することが楽しみとなり、積極的に取り組むことができるようになる。家庭での実践の場を設けるだけでなく、実践したことを友達と情報交流する機会をもつことで、よりよい生活を工夫する力を養う。

・生活の技能

授業で習得した技能は、繰り返し実践することで確実なものとなる。そのためには、段階を追って丁寧に指導し、それを反復したり、発展させたりするような家庭学習を与え、経験を積み重ねられるようにする。また、個別指導の時間を確保し技能の習得に取り組めるようにする。

・家庭生活についての知識・理解

知識や理解は、実生活で生かし、経験を繰り返すことで身に付いていくものである。また、知識をもとに実践する中で、状況に応じて様々な対応が求められる。従って、体験学習を多く取り入れるとともに、課題を解決するためにはどうしたらよいか考えたり、実際にやってみたらどうだったかを振り返る機会を設ける。

生活科

生活科における昨年度の授業改善推進プランの検証

<取り組みにおける成果と課題>

- ・ 相手意識をもたせたり、導入を工夫したりすることで、単元の学習への思いや願いをもたせることができた。
- ・ 一つの単元の中で繰り返し活動する場を設定することで、児童の気付きを深めたり広げたりすることができた。
- ・ 校外に出たり、様々な人との関わりをもたせたりする多様な活動を行うことにより、関心・意欲を高めることができた。
(1年生の幼稚園・保育園児との交流、2年生の地域の方へのインタビュー、1・2年生固定ペアでの交流等)
- ・ 振り返りや伝え合いの表現活動を繰り返すことで、気付きや思いを表現する力が伸び、友達のよさにも気付けた。
- ・ 安全性の観点から、2年生の植物の栽培の中心をさつま芋から野菜に変更したため、実際の栽培活動と作物に関する調べ活動、発表活動が強く関連付けられ、関心・意欲が高まった。
- ・ 入学直後のスタートカリキュラム、2年間を見通した学習経験の積み重ね、表現場面と表現方法の工夫、地域環境の変化への対応などを視点に、年間学習計画を見直していく必要がある。

生活科における児童の実態

観点別実態の分析

○生活への関心・意欲・態度

グループ活動や1、2学年のペア活動などを通して、友達と関わる楽しさを感じている。植物や虫、魚などを継続して世話をし、その成長や変化に興味・関心が高まった。活動の目的を「知らせる、楽しませる、教える」など相手を意識させたことで、各自がめあてをもつことができ、相手の反応により充実感・達成感を味わったことが、次の活動への意欲につながった。校内や地域を見学するだけでなく、聞き取り活動を一人一人が経験することによって、学習後にも関心が継続する傾向がみられる。

○活動や体験についての思考・表現

校内や地域で働く人への聞き取りやグループ活動、発表会などの経験の積み重ねにより、コミュニケーション能力が高まっている。異年齢児童との交流により、相手を思いやったり、気持ちを考えたりできるようになった。分かったことや気付いたことを絵や文で表現し、それを伝え合う活動を段階的、継続的に指導することで、表現力が身に付いてきている。しかし、個人差も大きいいため、一人一人の表現力をより高め、適切な伝え合いによって思考を深めていく必要がある。

○身近な環境や自分についての気付き

学校探検、公園探検、町探検などを通して、行ったことがなかった場所を知ったり、既知の場所も違った視点で捉えたりすることができ、新たな気付きが生まれ、もっと調べてみたいという意欲につながった。植物や動物を自分たちで育てることにより、生命や自然の不思議さに気付くことができた。気付きを生活の中に生かし実践を継続していくことや気付きをもとにした思考については、個人差が大きい。

実態に基づいた授業改善のポイント

○生活への関心・意欲・態度

- ・ 交流活動において関心や意欲が継続するようにしていく。
- 学級内のペア活動・グループ活動を積極的に取り入れる。1・2学年の交流活動を年間計画に位置付ける。未就学児、校内で働いている人や地域の方と関わって行う活動を意図的に取り入れ、関わりを計画していく。

○活動や体験についての思考・表現

- ・ 一人一人が活動や体験について考え、表現する活動を行う中で、話し合いによって学級としての思考・表現を高める。
- 気付いたこと・思ったことを絵や文で表現することを段階的に積み重ねるだけでなく、各自の思考を高めたり深めたりする意図を明確にもって、伝え合ったり話し合ったりする活動を行っていく。

・疑問や課題に対して自分なりの推論や解決方法を繰り返し考えさせる。
→試行錯誤できる繰り返しのある指導計画を立てる。また、結果発表だけでなく、経過を伝え合う活動を充実させることで、思考力や表現力を高めていく。

・自分の思いや考えをもつことや表現することが苦手な児童に対して、思考や表現を広げることができるよう支援する。
→選択型で思考を促したり、見たり調べたりする観点や表現の型を示したり、友達のよい表現を知らせたりする。

○身近な環境や自分についての気付き

・一人一人の気付きのよさを認め、次への意欲につなげていく。

→単元の狙いに沿った気付きについて教師が賞賛し自信をもたせ、意欲を高める。伝え合いによって気付きを共有させ、思考を深めさせていく。

・気付いたことを生活の中で生かし、実践を継続させていく。

→目的意識をもたせ、継続して実践できるように支援する。他教科との関連を図り、実践へとつなげられるようにする。

生活科の授業改善策

○生活への関心・意欲・態度

●主体的に活動する子供を育てるために

・体験的な活動、人との関わりのある活動、多様な場での活動を多く取り入れることにより、関心・意欲を高める。

・活動や体験の中から、疑問をもったり次の活動につながる課題に子供が自ら気付いたりすることができるよう、繰り返し活動する場を計画的に設定し、意図的な声かけをするなど指導の工夫に取り組む。

・「～したい」という思いや願いを一人一人がもてるような導入の工夫をし、学習の段階に応じた目的意識をもたせることで意欲の持続を図る。

○活動や体験についての思考・表現

●思考力・表現力を高めるために

・活動の目的を明確にしていくことで、常にその目的に立ち返って、考えを深めることができるようにしていく。

・繰り返し活動する場を設定することで、経験を生かして自分の考えをより広げたり深めたりできるようにしていく。

・自分の活動や気付きが表現しにくかったり、友達の活動や気付きについて知りたくなったりするように、活動の形態や学習過程をくふうする。

・話し合うとき、共有できる部分（共有体験）を設定し、友達のよい点を自分の学習に取り入れられるようにする。

・隣の人→グループ→クラスのように、段階を踏んで伝え合いの経験を積み、友達の発表や考えに触れることにより、気付きを広げ深められるようにしていく。

・表現の難しい児童に対しては、表現の仕方を教えたり、友達のよい表現を知らせたりすることで、表現（思考）を支援し、考えていることを引き出したり整理したりできるようにする。

○身近な環境や自分についての気付き

●価値ある気付きに高めていくために

・児童の思いが表れやすいワークシートを作成することで気付きの幅が広がるようにし、見取りの材料とする。

・活動を振り返り、比べたり結び付けたりして言葉や文で表現し、気付きが広がるようにする。

・発言やカードから、教師が気付きのよさを認め賞賛していく。

・価値ある話し合いになるように教師が適切にリードし、気付きをもとにした思考が深まる助言をする。

●気付きを生活の中で生かし、実践を継続していくために

・道徳や他教科との関連を図り、実践していけるような取り組みをする。

・学校探検や公園探検などでは、見付けたことを地図に表したり地域への理解を深めたりする活動を設定し、3年生の社会科での学習に生かせるようにする。

・動植物の観察や世話をすることで、身近な動植物や自然に対する興味を高める。1，2年生で培った動植物への関わり方や観察の視点を3年生の理科で活用できるようにする。